vol.66

病院新時代

救急病院にふさわしい体制を整えつつ住民に寄り添い「街の保健室」をめざす

2024年2月、東京都小平市に開院したむさしの病院は救急医療に注力しつつ、誰もが気軽に相談できる「街の保健室」のようなかかりつけ医をめざす。

医療法人社団 晃悠会 むさしの病院（東京都小平市）

1階の広々とした救急センターは同院の心臓部。開院して間もないが、チームワーク良くスタッフがキビキビと動き回る

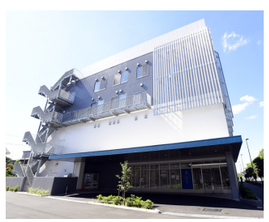
シルバーを基調とした洗練されたデザインが目を引く。東京都小平市の府中街道沿いに建つむさしの病院。真新しい病院の象徴が、初期診療と手術を並行して行える「ハイブリッドER」だ。

「救急搬入口からハイブリッドERにすぐ入れる設計、導線にしました。状態が落ち着いてからCT撮影に行かないと、容態が急変してしまうため、CT撮影のリスクをいかに下げるかが救急の課題でした。ハイブリッドERは患者さんを動かさず、逆にCTが移動し撮影できる『救急の拠点』で、当院の大きな武器です」。鹿野晃理事長・院長がそう言って胸を張る。新築段階でハイブリッドERが整備されるケースは珍しいという。

災害対策にも力を入れる。DMATは複数チームの編成も可能で、災害拠点病院の取得を視野に置く。さらに、敷地内にヘリポートを持つ近隣の大手タイヤメーカーと提携。災害時の救急搬送に活用する構想もある。

鹿野理事長は18年、埼玉県三芳町に「ふじみの救急クリニック」（現ふじみの救急病院）を開院。新型コロナウイルス感染症対策にいち早く着手し、PCR検査を24時間体制で行うなど、精力的な活動で注目を集めた。むさしの病院で掲げるコンセプトは「スピード」（分単位の生存率の壁に全力で挑む）、「コンビニエンス」（24時間365日、ためらわずに受診してもらう）、「コミュニケーション」（かかりつけ医として日頃から誰もが気軽に相談できる）――の3点。「究極の救急は『予防』です。普段から生活習慣病の管理、健診もしっかりやり、『街の保健室』をめざしながら、いざ発病したときは救急病院としての機能を果たします」と鹿野理事長。

二次、三次救急病院をフォローする「病病連携」に加え、高齢者施設などとの「病施連携」にも注力するつもりだ。「在宅医療・訪問診療で24時間365日、飛び回っていた時期もありました」という〝熱血漢〟の次なる一手に注目だ。



医療法人社団 晃悠会
むさしの病院
住所：東京都小平市小川東町1-24-1
TEL：042-313-5520
病床数：132床
診療科：19科

写真＝関口 宏紀

1 ハイブリッドER。普段は奥の部屋で通常のCT検査を行うが、救急初療室で必要なときに、間にある扉が開き、CTが2つの部屋を行き来する　2 真剣な表情でハイブリッドERの制御機器を操作するスタッフ　3 手術室は最先端の医療設備を備える　4 リハビリテーション室で機能訓練する同院の小田瞳医師。神経難病と闘いながら診療にあたる　5 救急搬送口に設けられた「ER」マークが目を引く　6 独自に導入する2台の救急車。うち1台はドクターカーとして使える高規格車だ　7 「困っている患者さんを少しでもお助けしたい」と話す鹿野理事長

むさしの病院の新たな視点

- ◉救急医療の充実と発展に努める
- ◉災害医療や感染症対策に積極的に取り組む
- ◉地域包括ケアシステムの一員として医療機関、施設と密に連携

(C) 2024 日本医療企画